

福祉用具専門相談員の進化・向上に期待する

福祉用具専門相談員のレベルアップと福祉用具の更なる普及を目指して、活動を展開している全国福祉用具専門相談員協会。その取り組みや福祉用具に関する提案などを伝えるシリーズの第四回は、目白大学教授の金沢善智先生の「執筆です。福祉住環境学を専門とされている金沢先生に、福祉用具導入時の留意点や福祉用具専門相談員に求められることなどについて述べていただきました。

のど元を過ぎても熱さを感じない

皆さんには、もう忘れてしまったのだろうか。それとも慣れてしまつたのだろうか。もしや利用者よりも先にあきらめてしまったのだろうか。仕方のないことなのだろうか。

ビスが大きく変わろうとしていることを！

り響いたことをよく覚えている。

私はこのような福祉用具の利用制限という残念な結果に陥った理由の一つとして、「利用者の生活（人生）」と福祉用具をマッチングしきれなかつた、サービス者側の原因があると考へる。別の言い方をすれば、身体機能の状況だけを考えて福祉用具導入を短絡的に導入することに終始し、住環境や介護者・家族を含めた社会資源の状況も踏まえて、ケアマネを中心とする多数の専門家が連携して総合的に考え、それぞれの福祉用具の導入理由を明確にしてこなかった場合が多く見られたということである。

当然、利用者は、今後の生活を維持させる上で、多かれ少なかれ身体上のリスクが高い人であり、機器によつてそれ自身能力の不足部分を補完されつつ、動いている生活障害者である。そのような人々が利用する福祉用具を、利用者に対してより適切・適量・適時、提供するためには、健常な人間の身体や運動の特性を理解する意図で、専門家全員で考へることが重要である。とりわけ「福祉用具専門相談員」が、ケアマネの強力な恵み袋でなければならぬ。その強力な恵み袋によって、常に重力にさらされながら動いている我々の身体の内外において、どのような現象が起きているのかなどについて、医学基礎を中心とした学問に「運動学」がある。

運動学は、その名のとく、人間の運動の科学である。「動作分析」のためのリテラシーとも言える。この学問によって培われる「評価の視点」、そして「ことば」が必要不可欠である。そのような「基礎医学的知識」と「評価の視点」、「ことば」が体系的に集まっている学問に「運動学」がある。

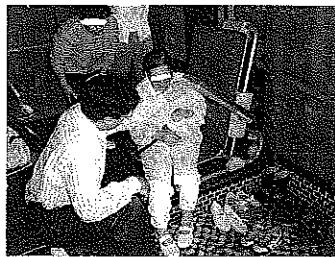
一方、人の動きを分析するといふ



金沢 善智

目白大学 保健医療学部 教授 医学博士

君は知っているか？ 今、福祉用具貸与サービスが大きく変わろうとしていることを！



リフトの一種である「立ち上がり用イス」のモニタリングの様子。

ことは、それを生業とする理学療法士などのセラピストにとっても容易なことではない。まずは分析するための視点が必要である。その視点を得るために、動作の原動力である筋肉がどのような神経支配のもとにどのように動き、その力がどのように骨格に伝達されることにより、一部の人には利用できるという朝令暮改があったものの、特殊寝台を使えなくなるといふ不安の電話が、私の研究室で鳴

動学上の理解を深める必要がある。この理解によって、それまでとは別次元で人間の動作を観察的に分析できることになるはずである。

しかし、視覚的に分析できるようになるだけではさほど役立たない。それら分析した内容を、正しい言葉で表現することで初めて、福祉機器の適合などに応用できる。骨格や筋肉、

モニタリング視点を養うことの重要性

は、当該の問題点を把握するための評価や

問題点を解決するための「助」として

導入する、それぞれの用具に関する「明確な導入理由」、そして導入したことによって、どのような生活が達成されるようになるかという「生活目標」

について評価し、判定し、そして反省することであると考へる。そのためには、当然、利用者の生活継続を阻む

問題点を把握するための評価や

問題点を解決するための「助」として

導入する、それぞれの用具に関する「明確な導入理由」、そして導入したことによって、どのような生活が達成されるようになるかという「生活目標」

について評価し、判定し、そして反省

することであると考へる。そのためには、当然、利用者の生活継続を阻む

問題点を把握するための評価や

問題点を解決するための「助」として